

修士論文

初等教育における教育哲学の展開

—デューイの教育理論と実践への応用—

Development of Educational Philosophy in Elementary School: Applying John Dewey's Educational Theory to Practice of Environmental Education

論文提出者 熊谷佑美

(人文科学研究科 人間科学専攻)

論文の要旨

本稿では、種々の問題を抱える日本の学校教育の現状をふまえ、「教育とは何か」といった教育の本質を問い直すことを目的としている。そのために、アメリカの教育哲学者ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の教育理論を吟味し、日本の初等教育における教育理論と実践への応用を検討する。

第一章「デューイの教育哲学の背景と基本理論」では、デューイの社会観と基本理論を概説する。彼の歴史的な社会観には、人間の生活はたえず更新される「経験—探究—学習」の過程によって、進歩的な社会を構築しようとする民主主義の概念が根底にある。そこでは、学校は民主的な人間を育てる基盤であると考えられている。また、デューイの基本理論では、「経験」から「習慣」、そして「社会的慣習」へと進歩し、「知性」によってその都度の「よい」生き方をプラグマティックに実現することに重点が置かれている。経験の連続性には、主体と客体が常に相互作用し、「脈絡をもった全体 (コンテクスト)」の中で、「探究的思考 reflective thinking」を養うことが目指される。デューイ教育哲学に通底するものは「経験の理論」と「探求的思考」が基本的枠組みである、と考える。

第二章「デューイの実践的教育論」では、子どもの潜在力を生かすための教育環境づくり、固定した目標ではない更新的目標の設定、体験的な学習教材、学校と社会が切り離されていないカリキュラム編成などを考察する。そして、子どもの体験を「意味ある経験」とする学習や教育において「見通しをもった目的」的活動の重要性について述べる。さらに、「何を教えるか」と「いかに教えるか」という理論と実践の統合を図った「実験校 (デューイ・スクール)」によってその検証を行なう。実験校で行なわれた探究的な活動は、「なぜ」という問いから出発し、教科が横断的に広がっていく体験学習の過程を確認することができる。デューイにとっての実験校とは、子どもたちの体験的な活動を軸としながら、他者と協同的に学習できる「学びの場」を提供する試行実験にあった。実験校が、当時の社会の発達に適応した教材と子どもたちの体験学習の再構成を試みた役割は大きい、と考える。

第三章「日本の初等教育における『総合的な学習の時間』の展開」では、デューイの体験的で総合的な教育理論を踏まえながら、日本の初等教育への応用を探る。特に、現代の日本の各学校で実施されている「総合的な学習の時間」における、体験学習を含んだ「環境教育」を具体例として取り上げる。環境教育は、知 (知識)・情 (情操)・意 (意志 (思)・行動) の調和的成長を目指した総合的な学習である。そして、「経験—探究—学習」という環境教育のプロセスにおいては、厚い質的な「体験」を「経験」として意味づけ、他者と協同して課題を解決しようとする学習活動を重視する。具体的な活動としては、甲南三法人 (幼・小・中・高、女子中・高、大学) の「環境教育プロジェクト」(文部科学省研究開発校) において行なわれた米づくりの事例を紹介する。

以上のように、デューイの教育理論を日本の初等教育における実践への応用として、教育の本質を総合化したものと位置づける。そして、種々の問題を抱える現代の教育界に求められるものは、体験的な実践的教育を通じて子どもたちの“心”の環境を整え、人間性を回復するところにある、と主張する。